

序に代えて

大阪へ

文学における自己実現を考察する

東京駅は吹雪いていた。折り返しになる上りの新幹線が少し遅れているとのことで、ホームの北端近くに並んで待っているわたしは、アーミーブルーのダウンコートの肩を、溶けた雪で濡らしてしまった。ようやく滑り込んだ列車は新型の「のぞみ」車両の「ひかり」だった。

土曜日なのでどうかと思ったが、運良く混んではない。三人ならびの窓際に席をとり、コートを棚に上げ小型のトランクバッグから本を取り出した。これは濟州島文学選『耽羅のくにの物語』という本で、一週間前にこの本の出版記念を兼ねた朝鮮文学研究会で手に入れたものだ。講演者は呉成賛という濟州島在住の作家で、この本にももちろん作品が収録されている。講演の後の出席者との意見の交換では、通訳を吹っ飛ばして朝鮮語が飛び交い、中にはなかなか激しい演説をぶつ詩人もいて、熱のある集まりであった。二次会も盛況で、大声で作家の金石範さんに議論をぶっかける人もあった。

シートをやや斜めにして、巻頭の玄基栄の短篇を読み始めると、車内販売の女性がやってきたので、ビールとミックスナッツを求めた。新幹線に乗ったらこれに決まっている。本はどうせたいてし読みはしない。新横浜からかなりの人が乗ってきた。わたしの横にも若夫婦といった感じの背の高い男女が座った。横目でちらつと見ると、日本的でなかなか色っぽい妻である。わたしは自分の白い中国製のセーターの汚れが少し気になってきた。イカスミとキムチのシミが着いているのを除いても、袖口などがグレーになっている。

隣の乗客には知らぬ顔をして本に眼をおとしてしていると、やっぱり眠ってしまった。わたしは乗物に乗ると眠るのだ。朝の通勤列車のたつた十分でも、立ったまま半分眠っている。ビールを飲んだのでトイレに行きたくなったが、隣の男女も眠っているので立てそうもない。到着は少し遅れる見込みだ。

かつてわたしは新幹線の車窓から雪景色の変化を見て心を動かしたことがある。Rという文学団体の総会に出席するために下関に行く途だった。だんだんと雪が強くなってきた。車窓の外を流れる景色もそれにつれて白くなってゆく。道の色も、畑の色も、木々も、屋根も、色という色が雪によって消されてゆく。関ヶ原あたりではついに真っ白く輝く光景をなした。降る雪の量が増し、そして減っていくと同時に色のある景色が見えてくる。そうした変化の美しさは交通速度の速さの見せてくれる芸術であった。あっ、もう一度あの光景が見えるかも知れないと思った。

あのときは車内販売のコーヒーを飲んでいた。

今日は大阪行きでビールを飲んでいる。今属している文学団体の会議に出席するためだ。雪は強くない、むしろやんで来たようだ。

京都には八分遅れで到着した。隣の夫婦がやっと降りてくれたので、発車と同時にトイレにたった。

関ヶ原には雪が降っていなかったのに、大阪は雪だ。東京と大阪は雪。新幹線を降りて在来線のホームで立ち食いうどん屋に入った。今までも何度か寄ったことのあるカウンターだ。肉うどん、腹が減っているせいも手伝って、とてもうまい。地元でもときどき駅の立ち食いソバを喰うことがあるが、大阪の方が格段にうまい。喰い終わるとちょうど入線してきた列車にとび乗った。在来線で大阪駅から環状線に乗り換えて芦原橋に向かうためである。雪はどんどん降っている。

芦原橋は、鄭承博の小説に出てくる。『裸の捕虜』で主人公の承德青年が、徴用逃亡をでっちあげられて収容された、長野のダム建設現場から逃げて大阪に戻り日本人をかたって住んだのが、この芦原橋の付近である。鄭承博は水平運動の活動家の下で勉強した経験を持っている。在日朝鮮人作家としては変わった経歴の持ち主だ。

改札を抜けて直に雪を被ってみると、この雪は大分濡れる。駅の屋根の下に戻って鞆から携帯用の傘を出して歩いた。太鼓屋の大きな看板が目止まる。そして、広い交差点の斜向いに、い

つも会議の後に寄る中華「珉娘」の赤い暖簾が目立っている。そちらとは逆に曲がって踏切を渡るとすぐに、会場がある。前を歩く中年の男女三人も同じ会館に入って行った。見慣れぬ後ろ姿だ。会場の貸し出しボードを見ると、どつやら教師の同和研修集会のよつなものであるのらしい。わたしはまだちょっと早いと思ったので、ロビーのテーブルに荷物を置いて、会館内の書店に眼をやった。沖縄出身の小説家比嘉辰夫の大きな背中がこちらを向いている。

この会館に来たのはこれで数回目だが、いつも日曜日だった。今日は初めての土曜日で、書店が開いている。比嘉氏に挨拶すると、彼は笑いながら一冊の本を指し示した。

「こんなのがありますよ」

と、見ると『梁石日は世界文学である』というタイトルで、作者は平岡正明。「梁石日、福原圭一、平岡正明、岡庭昇は、天意によって義兄弟になった」という、いささかやくざめいた書き出しである。参考までに求めることにした。後で梁石日さんに会った時に話題の種ぐらいにはなるかも知れないし、梁石日論ならば読まないわけにはいかない。奥のカウンターに持って行って周りの棚を見ると、ここにはおもしろそうな本がたくさん置いてある。部落問題に限らず、朝鮮問題、女性問題、民族問題などおおまかに分類して置いてあるらしい。わたしの本も置いてある。珍しいことだ。神田の本屋とソウルの本屋でも見たという人がいたが、殆ど出回ってはいないはずだ。在日朝鮮人文学の作品やそれに関する本だけでも揃っていて、何冊も欲しいのがあったが、

荷物になるので結局もう一冊だけ、『資料金時鐘論』という九一年発行の本を買い求めて、エレベータに向かった。

その日の会は始まりは少し遅れたが、予定通り午後五時に終わった。さしたる実務的困難があったわけではないので、順調である。困難がないわけではないのだが、一時の大混乱期を経てるので、順調なような感じがしてしまうのだろう。

皆より幾らか遅れてロビーに降りると、だるまが帽子を被ったような恰好の針生一郎が、書店の方から小走りに近づいてきて、「さつき林君が持っていた金時鐘の本どこにあった」と訊くのだ。文芸・美術評論家の針生一郎は、昨年古稀を迎えたわたしの父と同じ歳なので、他人とも思えず、『資料金時鐘論』のあった棚まで案内して、それを取ってあげた。

雪はいつのまにか雨に変わっている。そう強くはない。小雨だ。われわれは昏間来る道すがらわたしが目印に見た「珉娘」の赤い暖簾をくぐった。座敷になつている三階の小部屋でビールと老酒を飲み、ごちそうを食べた。とりわけ手製の餃子がうまい。

埼玉文学学校で済州島出身の在日朝鮮人作家金泰生と出会って文学の心を学んだ比嘉辰夫に『耽羅のくにの物語』を見せると、

「あなたはすぐ手に入るんだから、ぼくは今すぐそれを読まなきゃならないですよ……」
と強引に奪われてしまった。仕方がない。

福岡から来た永尾眞が「この老酒はどこ製だ」と声を上げた。その言葉には中国製か台湾製か、というニュアンスが聞き取れた。わたしが老酒のラベルを見ると、「埼玉県深谷市……」とあった。大阪でも埼玉が巾を利かせている。二十人ばかりの宴席が部屋ごと微笑んだ。

この後、冷たい雨の中二次会三次会と続いて、なぜか京都駅から新幹線に乗り込んだのは、翌日の四時頃だった。文学の集まりというものはだらしのないところがおつおつにしてあるものだ。だらしのない奴が文学をやるのか、文学をやるのだらしなくなるのか。だらしのないようで、けっこう真剣でもある。

帰りは旧式のひかり、隣はサラリーマン風の男性で、なにやら書類を見ている。売り子が来たらコーヒーを貰おうと思つたままうとつとしていたら、隣の男の「ビール！」という声に驚かさず目を覚まし、つられてわたしもビールを買ってしまった。車内放送は雪のため東京着は三〇分ほど遅れると言っている。前日の新幹線で読んだ『耽羅のくにの物語』はない。まあいい、ビールを飲んだら眠ってしまおう。疲れをとっておかないと明日の仕事に響く。

（『さくら草通信』一九九六年春）